

政治研究結果報告書

—政治研究助成—

西暦2023年（令和5年）2月9日

一般財団法人 櫻田 會
理事長 増田 勝彦 殿

研究者 慶應義塾大学法学部教授

小川原 正道

第40回（2022年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

西郷従道に関する伝記的研究
(Biographical Research on Judo Saigo)

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

To write a biography of Judo Saigo who had been a strong politician and military leader in Meiji Japan, I had gathered a lot of materials relating Judo at Kagoshima Prefectural Museum of Culture REIMEIKAN. The materials are composed by letters from Kiyotaka Kuroda to Judo, Masayoshi Matsukata to Judo, Iwao Ohyama to Judo, Tomomi Iwakura to Judo, Kaoru Inoue to Judo, Akiyoshi Yamada to Judo and opinion by Chief of the Staff Office to Judo with diplomatic documents on Taiwan dispatch. Since these senders are leading statesmen and military leaders in modern Japanese government, army, and navy, the contents of these letters have important means in political and military history in Japan. Actually, these abundance materials tell internal affairs of Meiji Government and role of Judo as a statesman and Minister of Navy in Meiji era. Especially, the letters from Kuroda to Judo express their view on state, politics, and political situations. The Opinion by Imperial prince Taruhito who had served Chief of the Staff Office explains establishment plan of Japanese Navy in detail. Using these new materials, I will write a substantial biography on Judo. It will be published in 2024.

※研究の目的・研究方法・意義（和文 600 字以内）

近代日本における元老の一人であり、海軍大臣などの要職を歴任した西郷従道に関する伝記的研究を行うことを目的とする。報告者はこれまで、従道に関する基礎的資料調査に取り組み、

国立国会図書館憲政資料室所蔵・寄託の各個人文書に収録されている従道書簡、および東京大学史料編纂所所蔵「島津家文書」に収められている従道宛書簡などを収集し、その解説・分析を試みてきた。本研究では、新型コロナウイルスの感染拡大などの影響で、これまで実施できなかった従道の地元である鹿児島、特に鹿児島県歴史・美術センター黎明館において資料調査を実施し、鹿児島時代の従道や従道と薩摩閥政治家との関係などを示す資料を収集し、東京所在の収集済資料と合わせて分析を進め、伝記執筆に取りかかった。従道についてはこれまで、本格的な学術的研究はほとんど行われておらず、元老として、政治家として、軍人として、あるいは西郷隆盛の弟としての足跡、功罪などは、十分に解明されているとは言えない。現在執筆中の伝記では、これまでほとんど用いられてこなかった、上記、東京および鹿児島所在の資料を駆使することで、はじめての本格的な従道の評伝をまとめることを目指しており、その一環として欠かすことのできない鹿児島での資料調査を実施し、多くの貴重な資料を得られたことが、研究の最大の意義である。

※研究経過と結果の概要 (以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる)

鹿児島県歴史美術センター・黎明館での資料調査は、担当学芸員との入念な事前打ち合わせを踏まえて、2022年10月に実施した。同館所蔵の従道関係資料をデジタルカメラで撮影する形で資料調査・収集を進め、以下のような資料を収集した。明治7年5月6日・16日付島津久光左大臣宛三条実美太政大臣電報、明治10年5月29日付従道宛黒田清隆書簡、明治31年10月24日付従道宛黒田書簡、明治16年1月付三条実美宛佐々木高行・従道・山田顕義建議書「北海道諸事業維持方法建議」、年不祥11月25日付黒田宛従道宛書簡、年不祥4月10日付黒田宛従道書簡、明治31年10月30日付従道宛黒田清簡、明治20年付従道海相宛有栖川宮熾仁参謀本部長意見書「海軍組織計画意見」、明治32年6月付従道内相宛山科元行・油川信近・阿部隆明嘆願書「恩典之儀ニ付嘆願書」、年不祥2月6日付黒田首相宛従道海相書簡、明治9年7月5日付大久保利通宛従道書簡、「明治七年台湾事件及支那談判関係文書」、年不祥11月12日付従道宛岩倉具視書簡、年不祥9月5日付従道宛大山巖書簡、年不祥8月17日付従道宛黒田書簡、年不祥4月7日付従道宛井上馨宛書簡、年不祥6月9日付従道宛松方正義書簡、年不祥12月3日付従道宛山田書簡、年不祥2月23日付島津忠濟宛従道書簡、などである。紙幅の関係ですべてについて紹介することはできないが、薩摩閥の領袖であった黒田と従道の関係を示す資料が目立った。なかでも、西南戦争で従道は陸軍卿代理を務め、兄・隆盛の討伐にあたるという苦しい立場に置かれたが、戦時下の明治10年5月29日付従道宛黒田書簡は、両者がこの戦争をどう認識していたかを示す貴重な資料である。明治31年10月24日の従道宛黒田書簡は、いずれも元老となった両者が「国家重大事」について明治天皇の意向を踏まえて意見を交わしたもので、「内閣更迭之義」について論じている。同年11月30日付従道宛黒田書簡などとあわせて、彼らがどのような国家、政治、政局観を抱いていたかをうかがわせる、政治上重要な意義を有する資料と言えよう。明治16年の従道等の建議書は、黒田が関わった明治14年政変後に従道を含む政権中枢が北海道の開発についてどのような構想を抱いていたのかを示すものである。他方、明治20年の「海軍組織計画意見」は、参謀本部側が戦時と平時の海軍の役割を踏まえた上で、極めて詳細に艦艇の整備計画を示したものであり、日本海軍の創設過程を知る上で、大きな意味を有する。軍関係では、年不祥9月5日付従道宛大山巖書簡で大山が徴兵令の実施あたって苦況を吐露しているのが、興味深い。外交面では、「明治七年台湾事件及支那談判関係文書」は、従道によって実施された台湾出兵の終結に

際して中国と交わされた談判に関わる記録で、大隈重信、従道、大久保との間で作成された条約締結方針などの重要資料を含む。これらの公文書、私文書のほとんどは、これまで学界に知られていないものであるため、その分析を通して、元老、政治家、軍人、あるいは隆盛の弟として従道がどのように明治国家の建設と運営に関わったのか、その具体像が浮かび上がってくる。今後、資料の分析をより深めるとともに、他の資料とあわせて、従道伝の執筆に生かしていきたい。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

西郷従道の伝記を 2024 年に単行本として刊行予定

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご留意ください。